

## [特別企画2]

## ヘモグロビン不足者へのさらなる取り組み： 再来間隔の目安を示すことで、献血可能者を増やすことができる

松島奈穂美、池松愛子、甲斐志帆、中村 香、姫路奈々子、中山資子、

山内麻衣、松岡治子、狩野陽子、米村まり子、高村政志、井 清司

熊本県赤十字血液センター

### 【はじめに】

熊本センターでは平成23年10月より、ヘモグロビン不足者に対して看護師による栄養指導を実施してきたことで、採血不適格者が減少した<sup>1)</sup>。しかし、取り組みを続け成果が表れている中で<sup>2)</sup>、栄養指導後の再来者に限定し集計したところ、栄養指導後に献血できたのは38.0%（平成26年度）にとどまっていることがわかった。そこで、その再来者の献血可能率をさらに上げるために、ヘモグロビン不足者に対して新たな取り組みを行ったので報告する。

### 【対象および方法】

期間：平成27年6月～平成28年3月

対象：400mL献血のヘモグロビン不足者のうち、

男性Hb12.0～12.9、女性Hb11.0～12.4g/dL

方法：1. 性別およびヘモグロビン値別に再来間隔の目安を医務課と相談し設定（表1）  
2. 看護師による栄養指導後、再来間隔と目安日を記入した「ワン モア チャレンジチケット（以下チケット）」を配布し、次回来所時に持参するよう説明  
3. この取り組みを「ワンモアチャレンジキャンペーン」と題し、全施設で実施

4. 再来者の献血可能率を調査

### 【結果】

期間中の申込者数68,155名（男：48,724名、女：19,431名）のうち、ヘモグロビン不足者数は2,358名（男：402名、女：1,956名）で、そのうちキャンペーン対象者数は1,173名（男：165名、女：1,008名）であった。この対象者全員に栄養指導を行ってチケットを渡し、その後、319名（男：81名、女：238名）がチケットを持参して再来した。再来者の献血可能率は過去4年間で半分以下にとどまっていたのが55.1%に増加し、前年同期と比較すると有意に増加（P=0.0002）した（図1）。

さらに再来者319名のうち、286名（男：72名、女：214名）が再来間隔を守っての来所であった。この286名を再来間隔別にみると「1カ月」以降の再来は237名で、そのうち147名は400mL献血を行うことができた（再来者の献血可能率62.0%）。つぎに「3カ月」以降の再来は47名で、そのうち23名が献血できた（48.9%）。「半年」以降の再来

表1 ヘモグロビン値別の再来間隔

ヘモグロビン値*		再来間隔*
男	女	
11.9以下	10.9以下	—
12.0～12.4	11.0～11.4	半年
12.5～12.9	11.5～11.9	3カ月
	12.0～12.4	1カ月

\*ヘモグロビン値と再来間隔は、医務課と相談し決定

は2名で、献血できたのが0名であった(図2)。

### 【考 察】

熊本センターでは、栄養指導を開始した当初から、次回まで再来間隔を空けるよう献血者に対し

説明を行ってきた。しかし、日を空けずに来所することも少なくはなく、「説明しているのに、なぜ伝わらないのか」と悩みを抱えていた中で、「次回までの献血間隔を記入したチケットを渡すこと」が対策チームから提案された。このチケット

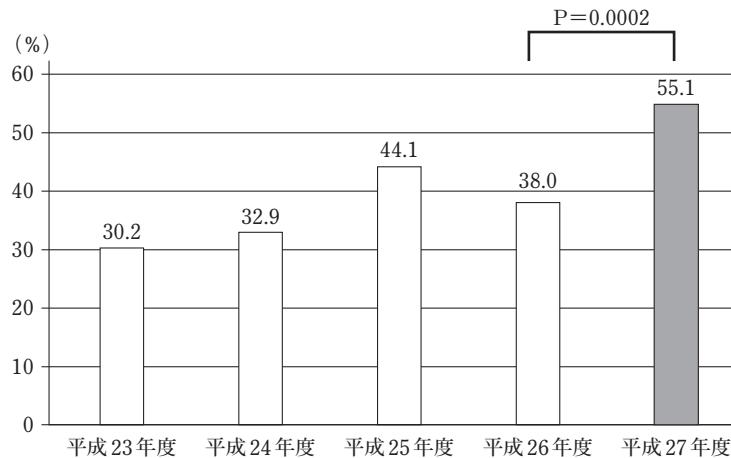


図1 栄養指導後の再来者の献血可能率

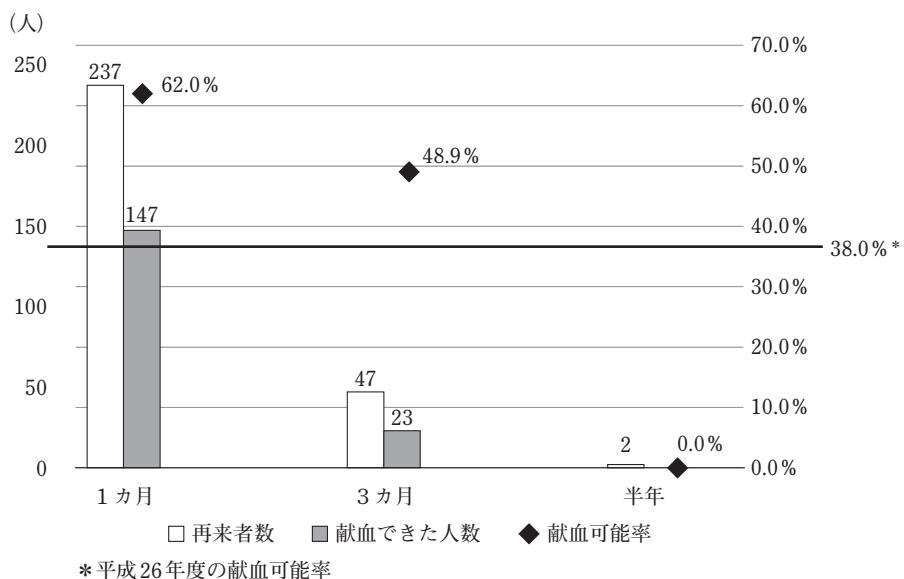


図2 平成27年度 再来間隔別の献血可能率

を手渡すことの効果は大きく、再来者の9割が期間を守って来所し、再来者の献血可能率を約1.5倍に増加させることができた（図1）。チケットにより次回までの再来間隔の目安が示されたことで、献血者は次回献血チャレンジまでの具体的な期日が定まり、「その日に向けて食事や生活の改善を図った」という献血者の声も多かった。また、指示通り来所され、「今日は日を空けてきたから大丈夫だと思う」との声も聞かれ、ヘモグロビン値改善には時間を要することが献血者に理解されてきたと思われる。

では、ヘモグロビン不足後どのくらい期間を空ければ適切なのか。ヘモグロビン不足後の次回献血までの再来間隔については、調べ得た範囲内では過去に検討した報告はなかった。そこで、医務課と相談して再来間隔を決定し、あまり細かくわけてしまうと混乱することが考えられたので、最

終的に今回のような3つの区分とした（表1）。その結果、キャンペーン前は再来者の献血可能率が38.0%であったが、「1カ月」空けたことで62.0%、「3カ月」で48.9%と増加し、今回の設定はほぼ妥当であると考えた（図2）。しかし、これらのデータは、まだ1年間の調査結果であること、また「3カ月」群、「半年」群については対象人数が少ないので、今後も引き続き検討していく必要があると考える。

ヘモグロビン不足者に対するこれらの取り組みは、ヘモグロビン値の改善だけにとどまらず、リピートドナーを含む献血者確保の拡大、比重針や検査にかかる試薬などのコスト削減、そして何よりも国民の健康増進に寄与していると考えられる。献血者の善意を生かすため、また国民の健康増進のため、これからも当センター採血課看護師によるこのような栄養指導を継続していきたい。

## 文 献

- 1) 上田康代ほか：「血色素不足者への食生活指導の取り組み」食生活指導で採血不適格者は減少す

る！、血液事業 37:675～680, 2015

- 2) 日本赤十字社 血液事業本部：血液事業の現状  
平成26年統計表, 15～16, 2014